

「臣民」と「不逞鮮人」

——今村栄治「同行者」に見る民族・移民・帝国——

柳 水晶

1. はじめに——一九三一年と一九三八年

今村栄治は一九三八年六月、滿洲行政学会の機関紙『滿洲行政』の文芸欄に短編小説「同行者」を発表する。この小説が発表される前年である一九三七年、「滿洲国」(現、中国東北地方)の日本語文壇では「滿洲文学とは何か」「滿洲文学はどうかあるべきか」といったいわゆる〈滿洲文学〉概念化議論が紙上で繰り広げられた。この時期は、滿洲日本語文壇の中心地が関東洲の大連から滿洲国首都の新京(現、長春)へと移動した時期だった。それと同時に日本「内地」で滿洲移民が国策によって決定されることで、滿洲開拓文学への要求が高まった時期でもあった。一九三二年から一九三五年まで四回にわたって「北滿農業移民団」を武装させて送り出した初期武装移民期を経て、一九三六年広田内閣は「二十カ年百万戸移民送出計画」を提出し国策移民期に入った。一九三七年八月二十五日に広田内閣は滿洲移民計画を七大国策のひとつとして決定したのである。しかし、この時期、滿洲の日本語文壇では理想的な〈滿洲文学〉像への

合意にも至らず、理想的な〈滿洲文学〉たる具体的な作品も現れなかった。その後、一九三八年一〇月『滿洲浪漫』の創刊、一九四〇年『日滿露在滿作家短編選集』発行などの過程を辿って〈滿洲文学〉は「滿洲国」の文学として国策的な色を強めていくことになる。

このような状況下で、一九三八年発表された「同行者」の物語は「滿洲事変直前」、つまり一九三一年八月末の長春を背景にしている。そして、テキストには実際一九三一年に滿洲で起こった大きな事件が二つ挙がっている。滿洲事変と万宝山事件である。ここではこの二つの事件を時間順に簡単に見ておこう。

・万宝山事件

一九三一年七月二日、中国吉林省長春市郊外の万宝山で起きた朝鮮移民と中国農民の衝突事件。日本の植民地朝鮮では、東洋拓殖株式会社^①が中心となって没落農民の滿洲移民が進められ、三一年には六三万人に達した。移民は日本の手先と見られ、中国側の反日の矢面に立たされた。日

本は朝鮮での反華報復をあり、両民族の離間策のなかに満洲侵略の機運を盛りあげた。満洲事変は直後に起きた。

〔日本史大事典〕第六卷、平凡社、一九九四、

傍線引用者、以下の引用同様

・柳条湖事件

満洲事変の発端となった事件。一九三二年九月十八日夜、関東軍は参謀石原莞爾中佐らの謀略計画により柳条湖で鉄道路線を爆破し、中国軍のしわざだと偽り、攻撃を開始。

〔広辞苑〕第五版、岩波書店、一九九八

この二つの事件は共通して満洲事変と関係していることが分かるが、ここでは辞典的な説明に留めておいて、「同行者」との関係は後に考察してみることにする。

2. 張という男——今村栄治と「同行者」

今村栄治は一九一一年朝鮮で生まれ、本名は張チャンという。彼が朝鮮人だという記録は当時の満洲文壇で活動していた日本文学者達の手記などに記されているが、その詳細な経歴は確認できず、ただ彼が残した文章などを通じてのみ彼の軌跡を辿ることがができる。現在は、『新京日日新聞』に一九三五年八月二日から六回にかけて連載した「悪夢」が処女作として確認できている。〔資料参照〕蔡燦チャンが「在満韓人作家今村栄治の日文小説」で指摘しているとおり、「在満朝鮮人の作家達は大体、開放〔終戦〕まで創氏改名をせずに、韓国語で創作活動をしたが、今村

栄治の場合、日本名で日本語小説を発表したことは特別なケースだといえる。しかし、今村栄治の作品は収集段階であって、実物が手に入らない場合が多々ある。数編の新資料を発掘した金長善キナナガノは、一九三八年、今村の代表作「同行者」が発表される前までの彼の作品は恋愛を題材にしたものが多く、新聞に載せた短いエッセイなどからは、彼の文学に対する情熱が感じられるという。今村栄治が満洲文壇でどのような活動をしていたか、その全貌はまだ埋もれている状態だが、昭和十四年度版『満洲文芸年鑑第三輯』（一九三九・二）の著作人代表、発行人に今村栄治の名前が示されていることだけを見ても、どれほど彼が文壇の中心で活躍していたかが窺える。山本謙太郎は「在満朝鮮系芸文界の昨今」（一九四五・二）で今村栄治を「満洲の張赫宙チャクチュウ」と紹介している。終戦後は日本人の妻と共に中国に残留したが、その後の消息は不明である。

本稿で取り扱うテキスト「同行者」は、一九三八年六月『満洲行政』の文芸欄に発表された後、『満洲浪漫』創刊号（一九三八・一〇）、『満洲文芸年鑑第三輯』（一九三九・一）に再録されるなど、当時『満洲』の日本語文壇では注目を集めた今村栄治の代表作である。

「同行者」のあらすじは次のようにまとめられる。満洲事変直前、長春の朝鮮宿屋で申重欽シムウチンはいらいらする気持ちを抑えている。彼のいらいらは「日支関係」から来るものではなく、彼の個人生活のゆきづまりから来るものである。十年前、朝鮮から大連に渡ってきて以来、日本語だけを話し、日本人と働き、日本人と遊び、日本人と暮らしてきた申は、個人的には自分が

完全に日本人だと思っている。しかし、彼は生活のゆきづまりにより、満洲の田舎の長兄の所に行かなければならなくなつたが、今までの都会の文化生活から離れ、荷馬車で二日かかる「原始的」で「文化度の低い」田舎へ行く決心が付かない。そんな時に宿屋のお爺さんから、同じところへ行く日本人同行者がいると話を聞いて田舎へ行くことにする。

申重欽は、普段からの日本着物を「支那古着」に着替えて、「支那人」に変装し、荷馬車に乗ってみたら、同行者の日本人は朝鮮服を着ていたのを疑問に思う。また、日本人のお爺さんも同行の「朝鮮人」が百姓ではなく、日本語の堪能な教養のある人だということに不安を抱き、警戒する。そして、同行者の日本人から満洲の田舎では「不逞鮮人」が続出し、これから向かう地域も危険であると告げられて、申は驚く一方、「不逞な朝鮮人」と「日本人」との間に挟まれた自分の「宙ぶらりん」な立場を痛感する。荷馬車が丘を越えた頃、前方に八人の「不逞鮮人」が現れると同行者の日本人は短銃を持ち出して、申重欽を疑う。申重欽はこの瞬間「自分の宙ぶらりんな立場を、はつきりと地につけねばならない」と思い、「なんだつて僕を疑ふんです？」と叫びながら、同行者の銃を奪い取る。そして、申重欽は涙を拭きながら、短銃を「不逞鮮人」の方に向けて構える。

以上が「同行者」のあらすじである。次に、このテキストが当時どのような評価を受けていたかをみてみると、初出不明であるが『満洲芸文年鑑第三輯』に「これは立派な満洲で生まれた一つの完成品である。こゝに現れた日本人もさること乍ら、

申重欽といふ朝鮮人の、今までどこから日本人たらんとして来た、め、生活は失ひ、両者の何れでもない深い溝にはさまれ苦悶してゐる心情は充分注目に値する。東洋に起こつた国家的変動、民族的移動は、益々この種の人間達を生む可能性が多い時、この作品は磨きがかつた一つの提示を行つてゐる」と秋原勝二の文章が引用されている。そして、先行研究として、^{オキナガ}蔡燾は前掲論文で「この作品は日本人への同化を熱望する主人公が登場するという点で、親日的な傾向が強いと予測されてきた。しかし、決定的な瞬間に煩悶する主人公の姿を通して、韓・日両民族間の溝がいかに深いものかが再認識でき、また満洲の僻地では満洲事変直前頃、いわゆる「不逞鮮人」と呼ばれた抗日活動家達の活躍が粘り強く展開されていたことが確認できた事実は注目すべきである。」『大陸文学を読み直す』ソウル・大陸研究所出版部、一九九二」と論評する。また金長善^{キムナガシキ}は「今村栄治の文学初志とその変移」で「この小説『同行者』…『発表者注』は、例え満洲事変直前のことを書いたとしても、この小説で偽満洲国時代に日帝が掲げた民族協和の虚偽性も垣間見ることができる申重欽の形状から、作家自身の影が連想される。」『偽満洲国時期朝鮮人文学と中国人文学の比較研究』ソウル・亦楽、二〇〇四」と述べている。そして、西田勝は「今村栄治の内心の世界」で「今村栄治の『同行者』は、同胞からは裏切り者と見られ、日本人からは忠誠を疑われる親日派知識人の心理葛藤を、スリリングな劇的なシチュエーションの中で見事に描き切つた短篇で、『満洲文学』での数少ない傑作のひとつ」『植民地文化研究会『植民地文化研究』第四号、不二出

版、二〇〇五・七」と、これも高く評価している。

以上の同時代評と先行研究を見ると「同行者」のテキストは作家今村栄治と不可分の関係で論じられていることが分かるが、ここで注目したいのは「今村栄治」という日本人名の通名またはペン・ネームを使っていた、本名「張」という朝鮮人などれほど意識していたかという点である。先行研究では金長善のように主人公申重欽と作家今村栄治を重ねて捉える傾向が見られる。言い換えれば、それはこのテキストの作家が朝鮮人のアイデンティティを持っていたという前提から成り立つ論理である。しかし、当時（一九三八年）の読者において「今村栄治」が実は「張という男」であったという「事実」はどれほど認知されていたかは疑問である。特に韓国研究者の先行研究と秋原の同時代評を比較してみれば「作家のアイデンティティ」を巡る認識の差は明瞭であろう。このような疑問から出発して、本論文では果たして主人公は作家の分身であり、主人公の選択が今村栄治の選択と一致するといえるかについて、作品分析を通して考えてみたい。そして、主人公申重欽が「支那服」を着て田舎へ行くという行動はどのような意味を持つのか、また、小説の後半部に登場する「不逞鮮人」を通して読み取れるものになにかという問題に着目して、なぜ今村栄治は一九三八年に一九三一年の物語を書いたかを明らかにしたい。

3. 申重欽の「ゆきづまり」の状態と「いまいまして」

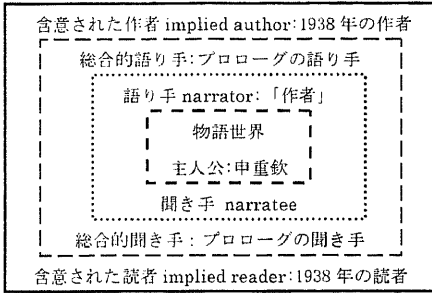
「同行者」は次のように括弧の中の地の文から始まる。

（——この短篇に出てくる主人公……申重欽の生活は、すでにひどくゆきづまつてゐる。少なくとも彼自身、さう思ひこんである。それはいづれこの小説を読んでいくうちに、理解できれば幸ひであり、またよしんば、どうもわからない、と苦情がでたところで、とにかく主人公がさう堅く思ひこんであるからには、彼自身にとつては、たしかにゆきづまつてゐるのであつて、作者自身も、こゝに身勝手な説明はできない立場にあるのだ——）（六八頁、最初と最後の括弧と「——」は本文によるもの）

この冒頭のプロローグからは、このテキストを読み解く重要な手がかりがふたつ見出せる。ひとつは主人公（申重欽）、語り手、作者、聞き手の位置関係であり、もうひとつは「ゆきづまり」という主人公の状況である。

まず、ここでは語り手を「作者」という形でテキストに登場させ、聞き手に直接話しかけることによつて、主人公、語り手、作者、聞き手すべてをフィクションのなかに織り込ませる戦略をとっていることに注目する。しかし、「作者自身も、こゝに身勝手な説明はできない立場にあるのだ」という最後の文章を見ると、括弧の中には「作者」を語るもう一人の語り手が存在することに気づくだろう。注意しなければならぬことは、この括弧の中に出てくる「作者」は以後のストーリー「括弧の外」の語り手になるわけだが、括弧の中の語り手とは一致しないことである。つまり、「同行者」はプロローグ「括弧の中」とそ

現実の作者 real author: 今村栄治



現実の読者 real reader

「同行者」における語りの構造

「同行者」における語りの構造

単純に言えば、読者はプロローグを経て主人公、申重欽の物語に接近するわけだが、読者は聞き手を誘う語り手に従って一九三八年から一九三一年へと移動することになる。その後、素直に語り手についていく読者なら、主人公の後ろに立つ語

れ以後〔括弧の外〕の語り手がそれぞれ違う複数の語り手になっている。これは、いわばオムニバス形式や入れ子構造の近代小説で使われる手法である。このようなプロローグの設定から得られる効果は幾つか考えられる。①プロローグ以後の全知の視点からではなく、②プロローグ以後の全知の視点からではなく、③「客観的」な「事実」を語ることの不可能性というモダニズム的な認識、つまり語りの不透明性の前景化である。ここで①は主人公と語り手 narrator との距離、②は聞き手 narratee 側にある読者 implied reader と語り手 narrator との距離の伸縮、③は語り手 narrator と作者 implied author との距離といった位置関係が把握できる。

り手の全知の視点を共有する。つまり、語り手を「作者」に刷り替えることによって架空の主人公や語り手、聞き手だけではなく、作者までフィクションとし、一見、距離を無化してしまふ。しかし、語り手が「作者」として作品に直接登場することは語りの中立性を否定し、不透明なものにすることに注意しなければならない。

次に、主人公の「ゆきづまり」の状況は、最初何の説明もなく唐突に宣言されるが、ストーリーが展開していくに連れて、ふたつの理由に整理される。左の三つの引用を見てみよう。

故郷を蹴つて大連へきてから、十年のあひだ、彼は言葉すら朝鮮語は用ひなかつた。友人たちにも、同郷の人はひとりもあなくて、日本人と働き、日本人と遊び、日本人と暮らしてきた。申重欽は、個人的には、あらゆる点で、完全な日本人になつてゐる。

生活が経済的にもゆきづまつて、この二ヶ月ばかり家に帰つてゐたり、今また長春へきて、朝鮮宿屋に泊つたりして、言葉もいくらか元へもどつたとはいへ、やはり朝鮮語は日本語のやうに、すらすらと言へない。朝鮮語を毛ぎらひはしなかつたけれども、なぜか他国語を話すやうな不自然さであり、身につかない気もちである。

風習は明らかにきらひであつた。〔七〇頁〕

「あんた朝鮮人のくせ、大いに日本人ぶつとるから、ちやうどよい都合ぢやらうて」

さう言つて、おやぢはいく人分もの蔑視を一人でするやうな眼つきで、申重欽をみると、またごほんどひとつづつ咳をした。

申重欽は、おやぢのあの言葉を、針尖のやうな感じで聞いた。いはゞそのために生活がゆきづまつたともいへる申重欽の胸にはそのやうな言葉は、チクリと痛さをもつてひゞき、またひどくいまい、ましくもあるのだ。

けれども彼は、うむ！と唸つて瞬間に心がきまつた。彼は眼がさめたやうに上体を起こして、堅いあんべらの上になちやんと坐つた。〔七〇頁〕

申重欽はそのやうな自分の姿が、なにかこつけないな道化役者のやうでもあり、また世紀の過程に生じた、ひとつの悲劇役者のやうにも感じた。

一間くらのまへに立つていく宿屋のポーターの、屈託もなささうにひどく威張つたやうな歩きぶりさへ、なにかになりそこなつて、しかも元の巢にもおさまりかねてしまつた自分の姿を嗤つてゐるごとくみえる。〔七一頁―七二頁〕

申重欽の「ゆきづまり」はあくまで「彼自身の、個人生活のゆきづまり」〔六九頁〕で、①経済的な理由からくる生活の困難と②日本人でも朝鮮人でもない自分の立場に対する精神的な不安がもたらした状況であると引用の傍線部から推測できる。

そして、この二つの理由はストーリー展開に必然性を与えている。①の経済的な困難は申が田舎の長兄のところに行く必然性

に、②の精神的な不安は彼の行動を決める選択に付きまとう葛藤の必然性に結びつくのである。①の経済的な「ゆきづまり」は日本人の同行者が出現することによって、田舎行きの選択が成されたが、ただ②の精神的な「ゆきづまり」は「なにかになりそこなつて、しかも元の巢にもおさまりかねてしまつた」で分かるように「日本人」か「朝鮮人」かといった選択が不可能だと申重欽は思っているのである。つまり、彼が陥っているアポリアは②の精神的な「ゆきづまり」が中心になることが分かる。そのために、引用の点線のところで見られるように、申重欽は「ゆきづまり」の状況を「ひどくいまい、ましく」感じるが、これに似た居心地悪い感情は左の引用からも「忌々しさ」「いまい、ましく」「いらいらする気持ち」と確認できるように「いまい、ましい」「いらいらする」といった感情表出語を使って頻りに表れている。

それでは、申がどのような場面で「いまい、ましい」「いらいらする」と感じるのか具体的に見てみよう。

申重欽は歩きながら、頸をかゝめて自分の身なりをみ下ろしたとき、なんともいへない忌々しさにとらはれた。

あちこちつぎめさへある汚れか、つた支那服。他からみればたゞ、煉瓦はこびか、でなかつたら道路掃除人夫よりは、少しばかり上等であるにすぎない(苦力)姿の自分は、今どこにゆかうとしてゐるのか!〔七二頁〕

あたりをみまはすけれども、それらしい姿はみえなくて、

たゞまんなかの馬車の荷物うへに席をしいて、朝鮮着物のぢいさんが乗つてゐる。その人は濃い黒髯が、鼻の下や顎や頬いつたいに生えてゐて、それが朝鮮着物には大へん不調和であつた。

一文字の濃い眉毛や、敏活に動く眼にも精悍さがあつて、ひどく朝鮮人ばなれしてゐる。が、申重欽は別に疑はなかつた。

日本人の他に朝鮮人の同行者もゐたのかと、申重欽はなぜか不平になる気もちを抱いて、「中略」たゞその服装からうける朝鮮人特有の頹廢的な感じのみがいま、いまいしく、申重欽はほとんどにらみつけるやうにした。「七四頁」

前掲の引用〔七〇頁〕は、朝鮮宿屋の「おやぢ」が「朝鮮人」でありながらも日本人気取りでいる申を非難する場面であつたが、ここでの二つの引用はそれぞれ、田舎に行くために「支那服」に着替え、中国人に変装した自分の格好を見下ろす場面、そして「朝鮮着物」を着て、先に荷馬車に乗っていた人が実は同行者の日本人であることに気づきつつ、何で「朝鮮人」に変装しているのかを疑問に思う場面である。以上の引用中の点線を引いた個所で確認できるとおり、申は自分が日本人でないことを認識されたり、中国人に見えたり、日本人が自分を「朝鮮人」に見せようとしたりする時にいららする気持を感じている。つまり、申重欽は「何人に見えるか」に非常に敏感に反応していることが分かる。

4. 視覚化するアイデンティティ

普段から日本着物を着る申重欽は日本語を話し、「日本人と働き、日本人と遊び、日本人と暮らし」ながら、「個人的にはあらゆる点で、完全な日本人」〔七〇頁〕であると考えていて、「都会の文化生活」を謳歌してきた。しかし、「生活のゆきづまり」によって「支那人の古着」に着替えて「原始的」で「文化程度の低い」田舎へと行くことになる。あちこち汚れた「支那服」を着た申は自分自身を「煉瓦はこびか、でなかつたら道路掃除人夫」に近いと嘆く。彼は、元は「朝鮮人」であれ、日本人であれ、その服を着替えることで民族をカモフラージュするだけではなく、文明／原始、文化人／労働者といった構図の中で自分を位置づけようとしたのである。

井上雅人は『洋服と日本人 国民服というモード』の「はじめに」で、「衣服は身体を所有するための手段であり、身体をメディアとして自己を表現する手段でもある。身体に対する不安と愛情が複雑に絡み合つて、常に他者の身体との差別化と同一化をはかろうとする目論見が、装いの多様性をもたらしているともいえる」と述べている。様々な民族が交じり合つて生活していた「満洲」という空間では、衣服はただのファッションや生活の基本手段ではなく、民族アイデンティティまでも視覚化する機能を果たしていた。申重欽の場合は、「日本着物」を通して、自分のアイデンティティを表現し、「他者の身体との差別化と同一化」を図ろうとしたと考えられる。それゆえに、「支那服」に着替えることにより、文明／原始、文化人／労働

者といった構図のなかで、自分の位置が逆転してしまう恐怖を感じたのであろう。それは単に文明のみ、階級のみといった一面的な問題ではなく、文明や階級のヒエラルキーに民族を代入して、民族自体を序列化させたことを意味する。申重欽は衣服という媒体で「序列化された民族」を表現し、自分の身体をもつてアイデンティティを可視化したのである。アイデンティティはあくまでも他者との関係のなかで生じる認識である。この点を考えれば、申重欽の「序列化された民族」の認識は彼自身に向けていくだけではなく、他者への眼差しにも投影されることはいうまでもない。前掲の引用（七四頁）で、申重欽は同行の日本人が着ている「朝鮮着物」を見て「朝鮮人特有の頹廢的な感じ」を覚えるが、このような「朝鮮人」「朝鮮着物」に対する抵抗感は一テキストの至る所で見られる。

申重欽のいららしさに拍車をかけるやうに、この宿屋のおやぢが、長い煙管と木製の大きな灰落しをさげ、全身を尊大にゆすぶりながら入ってきた。だぶだぶのバザが垢でびかびか光つてゐる。

申重欽は、このぢいさんの姿をみるたびに、なぜかわけのわからない嫌悪の情を憶えるのだつた。虫ずがはしるのである。「中略」そして、朝鮮の年寄り特有のあぐらのかきかたで、どかりと坐ると、灰落しに煙管の頭をこつんと叩いて言ひだした。「六九頁」

右の引用は「宿屋のおやぢ」の外見描写である。一見客観的

な描写に見えるが、傍線部からは「傲慢」で「不潔」な否定的なイメージを抱いていることが分かる。ここで注意しなければならぬのは、「傲慢な振る舞い」「不潔な服装」「煙管」といった表現は、すでに朝鮮人を修飾する常套の文句として定着している描写だということである。

南富鎮は『近代日本と朝鮮人像の形成』（勉誠出版、二〇〇二）で、近代日本における朝鮮人像は植民地化・同化主義といった政治的な意図と日本国民性の美徳を浮き彫りにするための陰刻として機能したことを色々な資料を用いて検証した上で、「近代日本によって作り出されたこのような悪徳の朝鮮・朝鮮人像は植民地期を経ながら朝鮮の知識人や民衆にそのまま受け入れられ、朝鮮人の自画像の原点として大きく立ちはだかる」（四五頁）と指摘し、また、「こうした言説は、植民地期をとおして学問的な真実として植民政策に反映され、朝鮮民族の自己反省と皇国臣民としての自己改造をうながす思想背景にもなっていくのである」（七七頁）と指摘している。右の引用で、「朝鮮宿屋のおやぢ」に対する否定的なイメージは、正に「近代日本によって作り出された」ステレオ・タイプの朝鮮・朝鮮人像で、「同行者」の主人公、申重欽も南のいうようなプロセスで形成された朝鮮人表象を内面化し、朝鮮人と朝鮮人が身体に纏う「朝鮮着物」に対するイメージを作ったと考えられる。

植民者によって作られた（朝鮮人と日本人）の二項対立的優劣の構図は支配民族だけの言説に留まるものではない。被植民者は劣等な自民族に対する嫌悪と優秀な支配民族に対する憧憬を抱き、被植民者が自ら自民族に距離をおいて、支配民族に同

一化を図るまでに至る。簡単にいえば、被植民者に対する植民者の視線の内面化こそが、日本人への同一化の欲望を形成したのである。そして、その欲望は衣服によって視覚化されていた。しかし、申重欽は植民者の視線を内面化しつつ、否定できない自分の民族アイデンティティに戸惑い「閉塞状態」(ゆきつまり)に陥ったのであろう。そこで、このようなどうすることもできない矛盾を統合する論理が必要となつて来るのだが、それは「日本民族」の同行者で、新しい日本国の国民、つまり「皇国臣民」になることではないだろうか。

5. 文明から原始への道程

申重欽が経済的な困難のために向かう長兄のところは「こゝから荷馬車に便乗して二日かゝるといふ××県」である。彼の旅の出発点である「こゝ」長春は鉄道が走り、水道タンクがある都会である。それに対して旅の到着点「××県」はどうだろうか。

住む家も、この宿屋のうすぎたなさや、あんべらさへいまいましてならないのに、きつとそこでは、あんべらも敷けなくて、藁くつかなんかのうへに寝るのかもしれぬ。窓はたゞ、土壁にちひさく穴を開けてゐるくらゐだらう。

ゆけば申重欽も、そんなところに住みながら、今まで握つてもみない犁鋤を把つて、百姓せねばならぬ。体は丈夫

である故、百姓仕事はできるとしても、考へてみるとそんな原始的な、野蛮な生活には、辛抱できる自信がなかつた。
〔七一頁〕

引用で、申が想像する「向こう」は「野蛮な生活」が強いられる「原始」の世界である。彼にとつて田舎の長兄を訪ねていくことは「原始への逆行」(七四頁)なのである。

それでは、申が長春を出て、「××県」へ向かう途中に目にしたものは何であろうか。それは「天秤棒の両端に野菜かごをさげた百姓たち」「ひろびろとした野原」「道の両わきには雑草」「一帯の大豆畑」「青葉のおひ」「桃いろに際どつた白雲」(以上、七五頁)であつた。つまり、「満洲」大地の自然とそこに住んでいる人々の日常的な風景である。「支那服」を着て、中国人に変装はしたもののいつたん出発してからは、外部の危険よりは自分の「孤独感と寂寥」(七六頁)の感傷にひたっている。それに比べて、同行者の日本人は最初から申重欽の機嫌を窺いながら、申の「愠つたやうな顔」(七五頁)から「或不安」(七五頁)を感じているが、このような申重欽と同行者の日本人との違いはその服装からも確認することができる。

「平壤なんかでは、朝鮮人のためにたくさん××××××××××といつてゐますが、あんたはなんだつて朝鮮着物なんか着るんですか。時節から、こんなところでは却つて危険ぢやありませんか。」(中略)

「実はねえ、あんたも知つてゐるでせうけれど田舎へゆけ

ばゆくほど不逞鮮人がたくさん巣くつてゐましてね。〔中略〕だからわしたちにとつて物騒なのは、支那人よりも不逞鮮人です。つい最近もわしたちの農場の人の一人、長春にいつて帰りにやられました——」

しかし申重欽には、そんなことは初耳だつた。〔七七頁〕

この引用からは、申重欽と同行者が各自「支那服」と「朝鮮着物」を着ている理由が読み取れる。まず、「××××××××××」に入る内容を推測すると、「万宝山事件」以後「朝鮮」で報復暴動〔在朝華僑襲撃〕があつたが、おそらくその事柄にかかわることだろう。それゆえに、その後あるかも知れない「在朝朝鮮人」への仕返しを恐れるといった理由から「支那人」に変装した。一方、同行者の日本人は、日本人の命を狙う「不逞鮮人」が、彼が向かつている日本人農場まで行く道に出没することを恐れて「朝鮮人」に変装し、「朝鮮人の同行者を探してゐた」〔七四頁〕のである。同行者の日本人が「農場までゆきつけば、われわれの手で充分警備してゐるので安全ですが、途中が危険です」〔七八頁〕というように、彼にとつては出発点と到着点は両方とも比較的安全な場所であるが、移動の過程は命が脅かされる危険な場所である。前にも述べたとおり、申の場合には出発点と到着点が都会と田舎、文明と原始といった落差があり、それゆえ移動の過程では不満と感傷を感じるだけで、緊張感や危機感はありません。同じ満洲の大地を旅する朝鮮人と日本人だが、その風景を見る眼は以上のような差異が認められる。

それは単に、持っている情報の差だけではなく、見方の違い

から来るものではないだろうか。そこには、日本人への同一化を図る欲望にとらわれて狭められた申重欽の眼差しが介在していることはいうまでもない。都会から田舎への道のりは、申重欽には「逆行」だつたゆえに、この旅は彼の欲望を極限に露呈した道程であつた。

それでは、狭められた申重欽の眼差しには見えなかつたもの、または見ようとしなかつたものとは何だつたのか。

6. 申重欽には見えないもの

大正の中期ごろまでは、朝鮮のあつちこちに民衆が蜂起して〔中略〕そして今もなほ上海とか、奉天とか、京城とか、大連とかの大都市でときたま一人二人捕へるといふことは、新聞など読んで知つてゐるけれども、いはば知つてゐるのはその程度であつて、田舎へゆけばゆくほどたくさん巣くつてゐるなど、申重欽は夢にさへ想像したこともない。〔中略〕また日本人がところもあらうに彼らのために生命を怯やかされながら、そのやうなところで農場など経営してゐるのか、〔後略、七七頁〜七八頁〕

この引用からは、申重欽の「不逞鮮人」像が読み取れるが、「その種の不逞の朝鮮人」〔七八頁〕といった彼の「不逞鮮人」像にも内面化された植民者の視線がうかがえる。しかし、被植民者の朝鮮人側からすれば、「同行者」に登場する「不逞鮮人」は日本帝国に抵抗して武力闘争をする独立運動家であることは

自明のことである。また、「生命を怯やかされながら」まで、「満洲」で農場を経営する日本人という設定は日本帝国の大陸進出の形態をまざまざと見せる個所である。

ここで「満洲移民」をめぐって中国と朝鮮と日本が衝突したある事件が浮上してくる。その「ある事件」とは、「日支の風雲いよいよ急なる、八月末〔中略〕万宝山事件」〔六八頁〕「万宝山の鮮農たちが、支那民衆のためにどれほど被害をうけやうが」〔六九頁〕と、このテキストが何回も触れているが、申重欽の関心は引かない「万宝山事件」である。「万宝山事件」に関する簡略な説明は一節で確認したとおりである。しかし、この事件の背景には朝鮮人の「満洲」移民と二重国籍の問題、土地の売買、中国政府の排日政策に伴う在満朝鮮人弾圧、朝鮮での「在満同胞擁護同盟」の活動などが複雑に絡み合っていて、事件の結果はむしろ日本帝国・日本軍が予期しなかった方向へ向かったことは先行研究でも指摘されている。「万宝山事件」直後は日本側の扇動に煽られて、在朝華僑を襲撃した朝鮮側も、そして被害を受けて朝鮮と対立した中国側も、事件後一週間が経たないうちに事態を把握し、冷静に対応するようになったのである。その結果、中国と朝鮮は日本帝国の拡張を防ぐために相互協力することになる。そして、このような背景の下に「不逞鮮人」の活動が活発化するのである。これについてもっと詳しく見てみよう。

『満洲日報』は七月三日夕刊の一面に「万宝山の形勢悪化して日支遂に衝突交戦」という見出しで前日の事件を報じている。

暴民と水路を挟んで警官隊が銃火に応酬／暴民の數一千名に上る

二日午前九時十分万宝山中川警部より鳩便によれば同八時半頃より日支間に交戦を開始するに至つた目下水路を挟んで激烈なる銃火を交へてゐるが支那側は白旗多数を押し立てた暴民五百余名から成るも統々応援隊増加中なるため午前中には一千余名には達するであらうと予想さる。

〔満洲日報〕一九三二・七・三二、一面

四月から万宝山地域に「鮮農」が入つて開拓を始め、六月早々「鮮農驅逐」を巡つて長春県政府と「鮮農」保護のために駐屯していた日本警察は緊張状態に突入した。その経過はしばしば満洲地域の日本語新聞に記事化されていたが、六月末からは連日「万宝山の緊張状態」が新聞の一面を飾ることになる。そして、中国農民と住民に対して発砲する日本警察に対抗するため七月二日の朝、中国農民三、四百人は七人の中国警察を帯同して水路の堤防を破壊するに至る。これが右の新聞記事の衝突事件である。

新聞記事を見ると、まず中国農民は「暴民」として規定されていることがわかる。また、中国農民の數も五百〜千人と推定されていて、実際は中国農民の正当な自衛手段で双方に被害もなかつた事件を、いかにも緊迫した状況にあるかのように報じていることがわかる。その後、「万宝山事件」は満洲の日本語新聞の一面に毎日報道されることはもちろん、日本「内地」の新聞や朝鮮の民族系新聞〔韓国語新聞〕にも大きく取り上げら

れる。そこには、事件自体の深刻さとは関係なく、世論を操作し、満洲武力侵略の機運を盛りあげようとする日本軍・日本帝國の意図が働いていることはいまでもない。

それに「鮮支」衝突の結果弾圧されることになるだろう。在満朝鮮人の保護を口実に満洲で軍勢を拡張するといった関東軍の意図もそこにはあった。その意図を露にしたのが、長春領事館から『朝鮮日報』長春支局長の金利三キム・イサンに虚偽情報を提供したこと、で、『朝鮮日報』はその情報に基づき七月二日、三日に「号外」を出す。『朝鮮日報』「号外」の見出しを見ると以下のようである。

- ・ 中国官民八百余人と二百同胞衝突負傷／駐在中警官隊交戦急報で長春日本駐屯軍出動準備／三姓堡に風雲漸急
- ・ 対峙する日中官憲一時間余交戦／中国騎馬隊六百名出動
- ／急迫した同胞安危
- ・ 撤退要求拒絶／機關銃隊増派
- ・ 戦闘準備中

中国人により在満朝鮮人が大きな被害を受け、緊迫した状況が展開されていると誇張された虚偽情報に煽られた朝鮮の民衆は、韓国内の華僑を襲撃することになる。この華僑襲撃事件は七月二日に仁川から始まり、一〇日をピークに全国に拡大する。しかし、早くも七月四日『朝鮮日報』の社説には「痛心する在満同胞の運命／綿密を要する擁護対策」と事態收拾の声が上がり、また、最初から慎重な姿勢を保っていた『東亞日報』も社説で「冷静な態度を取るべし／万宝山事件に対して」(一九三二

七・四)、「二十万同胞に告ぐ／民族的被害を打算し、虚無な宣伝に騙されるべからず」(一九三二・七・七)と朝鮮の民衆に訴えている。そして、七月十一日には、朝鮮各界聯合協議会の名義で「万宝山事件」は朝鮮人全体の意思ではないことを国内外に発表し、朝鮮・中国両民族の親善を取り戻すための声明書を南京国民党中央通信社に打電する。それと同時に中国側も日本帝國に大陸侵略の口実を与えるような事態にならないよう鎮静に努めている。その結果、日本軍の予想とは違って、在満朝鮮人に対する報復はなく、中国・朝鮮の排日機運は高まり、相互協力の下で排日運動が起こるようになる。

以上の経緯の「万宝山事件」が「同行者」の前景になるわけだが、申重欽の場合は、その一部分しか見ていない。申重欽が見ているのは『満洲日報』のような満洲の日本語新聞から得られる情報からなる「万宝山事件」で、前掲の引用(七七頁)の内容がそれである。つまり、それ以外の、日本帝國の謀略や朝鮮と中国側の事態收拾経緯、そしてそれに続く中国での朝鮮・中国の排日運動などについては情報もなく、知ろうともしなかった。申重欽は「不逞鮮人」の活動の意味を知らなかった、または知ろうとしなかったのである。

悪魔の眼や狼の牙をも怯えずに、冷静にみつめて暮らすだけの胆魂と無神経さをもたなければ、所詮いきでゆけないほどの時勢に当面してゐながら、「中略」時勢にまけて寄りつくべきすべてのものから絶縁されあらゆる方向へ突きおとされてゆく自分の姿は、やはり惨めであり、「後略、

この引用からは、「日支問題などより」「個人的なゆきづまり」にこだわっている申重欽が、彼自身は「悪魔の眼や狼の牙をも怯えずに、冷静にみつめて暮ら」しているつもりでも、実際は時勢に無自覚であるだけだという皮肉な視線が感じられる。その視線とは、申重欽のゆきづまりは「個人的なゆきづまり」ではなく、正に「日支」問題と朝鮮の被植民状況からくるもの、つまり日本帝国の拡張がもたらした結果であるという認識からではないだろうか。万宝山事件に対する現実認識の差異こそが主人公（また、主人公の眼差しに限りなく近い語り手）と作者を分離するファクターであつて、「不逞鮮人」の排日・抗日活動に関する叙述はそういう作者の認識を裏付ける証拠となる。そして、作者はプロローグの仕掛けを通して、主人公や語り手と距離をおいて、腹話術を駆使することに見事に成功しているのである。涙を拭きながら、短銃を「不逞鮮人」の方に向けるというこの小説の結末は、決して結論の出ないアポリア（ゆきづまり）から結論を出すしかなかった主人公の悲壮な選択であつたと同時に、既に決まっていた結論でもあつたのであろう。

7. 結び

一九三八年の今村栄治が一九三一年の申重欽という人物を通して描いたものは、植民者の論理を内面化したある種の典型的な被植民者の姿である。そして、その背景にあるのは「満洲移

民」と「開拓」をめぐる日本帝国主義対朝鮮と中国の対立構図であると考えられる。従つて「同行者」は、満洲事変が勃発した一九三一年と日中戦争一年目で、「満洲国策移民」が本格的に始まつた一九三八年をつなぐテキストとして読み取ることが可能であろう。本論文では「朝鮮人作家」今村栄治がどのような仕掛けを施して、一九三八年の「満洲国」を語っていたか考察した。しかし、私も「今村栄治」が「張という男」だといふ先入観から逃れることはできないままこのテキストを眺めていたことは認めざるをえない。「同行者」を「日本人作家」今村栄治、または、日本人でもなく、朝鮮人でもない「日本語文学作家」今村栄治のテキストとして読み直す作業も（満洲文学）という大きな枠の中で有意義なことになるだろう。これについては、今後、検討していきたい。

注

- (1) 『満洲行政』は会員が主に満洲国官吏である満洲行政学会の機関紙である。雑紙の性質上、行政・法律等の評論が主体となり、誌面が固くなることを改善するために文芸面を設けていた。理事長は新井練三、編集長は大坂巖。
- (2) 本稿は『満洲浪曼』第一輯（新京・文祥堂、一九三八・一〇、東京・ゆまに書房、二〇〇一復刊）に掲載されたテキストを用いた。
- (3) 詳しいことは、劉含発「日本人満洲移民用地の獲得と現地中国人の強制移住」『現代社会文化研究』No.21、二〇〇一・八参照
- (4) 北村謙次郎外『満洲浪曼』第一輯（新京・文祥堂、一九三八・一〇）
- (5) 山田清三郎編『日満露在満作家短篇選集』（春陽堂、一九四〇）

- (6) 『満洲国』の建国理念である「五族協和」(後、民族協和)「王道楽土」を体现した作品
- (7) 川村湊は『異郷の昭和文学——満州』と近代日本(岩波書店、一九九〇)で、今村栄治の本名を張換基と推定している。金烈主、許世旭、呉養鎬、蔡煥『大陸文学を読み直す』(ソウル・大陸研究所出版部、一九九二)参照。その他の在満朝鮮系作家達は「朝鮮語」「朝鮮語」で作品を発表した。主なメディアは「朝鮮語」新聞『満鮮日報』の文芸欄。
- (9) 今村英治以外にも大瀧重直、青木黎吉が在満朝鮮系作家として名前が挙げられているが、事実確認はできていない。山本謙太郎『満洲に於ける半島人文芸の動向』『国民文学』(人文社、一九四四・六)と三枝壽勝『満洲の韓国文学』『慶熙文選3』(一九七二・二)参照
- (10) 金長善『偽満洲国時期朝鮮人文学と中国人文学の比較研究』(亦楽、二〇〇四)
- (11) 山本謙太郎『在満朝鮮系文芸界の昨今』『国民文学』(京城・人文社、一九四五・二、四四頁)
- (12) 井上雅人『洋服と日本人 国民服というモード』(廣済堂ライブラリー、二〇〇一、五頁)
- (13) 近代日本における「朝鮮人」表象は、南富鎮『近代日本と朝鮮人像の形成』(勉誠出版、二〇〇二)、中根隆行『朝鮮』表象の文化誌』(新曜社、二〇〇四)参照。中島敦『巡查の居る風景』(一九二九)、長塚節『土』(一九二二)などの小説にも典型的な「朝鮮人」表象が用いられている。
- (14) 朴永錫『万宝山事件研究』(ソウル・亜細亜文化社、一九七八)
- (15) 『日本駐長春領事館長春市政籌備処函』(五〇号、一九三一・七・二)、『長春市政籌備処到日本駐長春領事館函』(一九一・一九二号、一九三一・七・二)、中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会編『革命文獻』(三三三号、台北、一九七〇、五三三頁―五頁)を参考にして纏めた朴永錫の同上書を参照
- (15) 『実際万宝山事件は従来、中国東北地方でしばしば起こった韓・中農民間の衝突と同類の事件で、人命の被害はなかった

が、中国東北地方侵略の口実を探っていた関東軍ではこの事件を利用することにし、長春領事館に指令を下して、多くの韓国農民が被害を受けたように朝鮮に報道させた。これにより、日本領事館から朝鮮日報長春支局長の金利三に虚偽情報を提供した。金利三は日本領事館側の情報をそのまま受け入れて万宝山事件が起きた現地にも出向かず、本社の方に伝送してしまった。朴永錫、同上書、九八頁

● 資料——今村栄治の軌跡

- 一九一(明治四十四) 朝鮮生まれ。本名張。
- 一九三五・八・二 「悪夢」『新京日日新聞』 六回連載
- 一九三五・九 「愛憎記」『新京日日新聞』
- 一九三五・一〇 「心中した女」『新京日日新聞』
- 一九三六・四・二 「佐和山一郎と(謝礼と批評)のこと」『新京日日新聞』
- 一九三七・一 「今年からは」『新京日日新聞』
- 一九三七・四・十二 「拳撃我が身へ持すべし」『新京日日新聞』
- 一九三七・五・十八 「この季節と僕(五月の落書)」『新京日日新聞』
- 一九三七・九 「凍屋」『新京文芸集團』 第三号
- 一九三七・九 「女たちの愛情」
- 一九三七・一〇・八 「忙中雑記」『新京日日新聞』
- 一九三七・一〇・十八 「病床雑記」『新京日日新聞』
- 一九三八・二・二四―四・八 「未完稿」『大新京新聞』 二七回連載
- 一九三八・五 「咳」『新京文芸集團』
- 一九三八・六 「同行者」『満洲行政』 第五卷六期
- 満洲文話会新京支部創立メンバー・幹事、『満人作家作品集 原野』 評論座談会参加
- 一九三八・十二、一九三九・一 「新胎」『満洲行政』
- 一九三九・四 戯曲「風雨のあと」『宣撫月報』
- 一九三九・四、五、七 「孤兒」『新天地』
- 北村謙次郎・吉野治夫・大内隆雄・小松らと共に文話会満洲各地

視察団参加

一九三九・十二 「出世」『宣撫月報』、『満洲文芸年鑑』 著作者人代表・
発行人

一九四〇 日本派遣団

一九四一・六 コント「霧雨」『満洲よもやま』

一九四一・七・二七 満洲文芸家協会設立、書記に

一九四三・三・二八／四・一 「新しき水田盤山の水田地帯を視て」
『満洲新聞』

一九四三・六 「栄興村の鮮農たち」『芸文』、『感激の日に』『建国十
周年慶祝詞華集』

一九四三・八 「現地の指導者」『続現地隨筆』

● 参考文献

〈日本語文献〉

秋原勝二 「今村栄治の面影」植民地文化研究会 『植民地文化研究』第
四号 (不二出版、二〇〇五・七)

井上雅人 「洋服と日本人 国民服というモード」(廣濟堂ライブラ
リー、二〇〇一)

今村栄治 「同行者」『満洲浪漫』第一輯 (新京・文祥堂、一九三八・
一〇)

太田阿山 「満洲移民の実情」(長野・信濃毎日新聞株式会社、一九三七)

岡田英樹 「旧『満洲国』の朝鮮人作家について」昭和文学会 『昭和文
学研究 特集 昭和文学とアジア』第二五集 (笠間書院、一九九
二・九)

川村 湊 「異郷の昭和文学——『満州』と近代日本」(岩波書店、一九
九〇)

監修 『野川隆・今村栄治・埜英夫作品集』(ゆまに書房、二
〇〇二)

黒川創編 『満洲・内蒙古／樺太』(新宿書房、一九九六)

田中益三 「受難のポリグラフィ——在満」朝鮮人像について』昭和文

学会 『昭和文学研究 特集 昭和文学とアジア』第二五集 (笠間
書院、一九九二・九)

中根隆行 『朝鮮』表象の文化誌』(新曜社、二〇〇四)

南 富鎮 『近代日本と朝鮮人像の形成』(勉誠出版、二〇〇二)

西田 勝 「今村栄治の内心の世界」植民地文化研究会 『植民地文化研
究』第四号 (不二出版、二〇〇五・七)

編 『満洲国』文化細目』(不二出版、二〇〇五)

満洲日報社 『満洲日報』(大連・満洲日報社、一九三一・七・三)

山本謙太郎 『満洲に於ける半島人芸文の動向』『国民文学』(京城・人
文社、一九四四・六)

「在満鮮系芸文界の昨令」『国民文学』(京城・人文社、一
九四五・二)

〈韓国語文献〉

金長善 「偽満洲国時期朝鮮人文学と中国人文学の比較研究」(ソウ
ル・亦楽、二〇〇四)

蔡燠 「在満韓人作家今村栄治の日文小説」金烈圭、許世旭、具養鎬、
蔡燠 「大陸文学を読み直す」(ソウル・大陸研究所出版部、一九
九二)

「日帝強占期在満韓国文学研究」(ソウル・ギップンセム、一九
九〇)

朝鮮日報社 『朝鮮日報』(京城・一九三二・七・二、三、四)

東亜日報社 『東亜日報』(京城・一九三一・七・四、七)

朴永錫 『万宝山事件研究』(ソウル・亜細亜文化社、一九七八)、『万
宝山事件研究——日本帝国主義の大陸侵略政策の一環として』
(東京・第一書房、一九八二)

(ユ スージョン 筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究科 総合文学)